



1. プロローグ

カナディアン・ロッキーにはいつかは行きたいと思っていたが、まだ早いとも考えていた。私のように岩や雪の技術を持たない人間にとっては、ピークを極めようとするのが難しすぎる。ハイキングコースであれば、カナダは高度な文化国であるのでロッジやコースの整備はいいので簡単すぎる。だからもっと年取ってからでいい。そんな風に思っていたところに“岩崎元郎さんとカナディアン・ロッキーをスノーシューで歩く”という企画が舞い込んできた。スノーシューであればマイ・スノーシューも持っているし、日本の山で何回かやってけっこう楽しんでいる。“よっしゃ、本年一発目の海外登山はこれに決めた。”

2. 成田での集合

成田空港に集まったのはたったの5人。女性4人に男は俺一人。テレビでもおなじみの登山家であり今回のツアーコーディネータを務めてくれる岩崎元郎さんが付いてくれるのと、カナダに着いたらツアーリーダーの岩田薫さんが迎えてくれるはずであるので、最終的には男も3人になる予定。岩崎さんから“まあ、こちんまりとファミリアなスタイルでいきましょう。”と声をかけられる。岩崎元郎さんと一緒に歩くというのだから、すぐ満員になってしまうだろうと思って急いで申し込んだのであるがそうでもなかった。

バンクーバーでの入国審査でめちゃくちゃに時間がかかって、カルガリー行きの便に一便乗り遅れたが、まあ何とかカルガリーにたどり着いて岩田さんとも合流できた。飛行場からはカルガリー市中心部を無視して、岩田さんが自分で操る定員11人乗りくらいの大きな車で最初の宿泊地のキャンモアへまっすぐ向かう。カナダは日本の27倍の土地に3000万人が住むという。車から見える景色はただひたすら続く地平線である。20kmも続く直線道路もあるという。

カルガリー近郊の家は、同じ造りの建売住宅が目立つ。このあたりはカルガリーの町が大きくなったためにできた、いわゆる新興住宅地域であるということだ。30分も走るとロッキー山脈の一角に入ってくる。車を運転しながらの岩田さんの説明は特徴がある。前・後・右・左という表現は使わない。

“10時の方角に見えるのがキャンモアの象徴ともいえる山のスリーシスターズです。”などという。2時間もするとキャンモアの町に入り、今日から3日間はこちらを中心にして動き回る。岩田さんは30を少し出たくらいの年で奥さんと二人この街に住むという。子供のころから親の仕事の関係で海外生活が長く、この調子の生活が続けば、日本での生活よりも海外のほうが長くなるみたいだ。もしかしたらすでにそうなっているかもしれない。

われわれのキャンモアでの3日間の宿泊施設「ラディソン・ホテル」へ着くと、岩田さんの所属する旅行会社の難波さんも手伝いに来てくれている。苦みばしった、岩田さんとはまた違うタイプのいい男である。われらのメンバーの中野さんが“私たちのためにイクメンのガイドさんをそろえてくれたねえ。”と喜びの声を上げる。中



写真 1 カルガリー郊外の住宅街



写真 2 キャンモアの象徴スリーシスターズ

野さんは普通感覚では十分おばあさんの 78 歳になるということだが、歳のことなんか関係なしに国内外の山々を歩き回っている人なので、気持ちも外観も若い。それでも本人は、近頃は“まだらボケからべったらボケになった”などという。

3. 犬ぞり体験

スノーシュー・トレッキングの初日は「犬ぞり体験ツアー」から始まった。岩田さんはこの土地の山岳ガイド学校を終了した後、この犬ぞりツアー会社で一昨年まで働いていたらしい。150 匹いる犬の名前を今でも半分くらいは覚えているという。当然働いていたところは全部覚えていたという。しかも犬ぞり使いは常に後ろから犬を見るのであるから、犬のお尻で判別できなければいけないらしい。それができないようでは仕事にならないらしい。どうせド素人相手の商売なんだから、こっちは椅子に座っていれば馬車の御者みたいなやつが操ってくれるのであろう

と思っていたら、犬ぞり操縦講習会から始まった。この犬ぞりは 6 頭ないし 8 頭の犬から構成されて、2 列ずつ縦長に並べる。最初の 2 頭はリードと呼ばれ、強くしてしっかりしたやつが勤める。次はポイントと呼ばれて次期リード候補のホープ君である。その次はなんていったか忘れたがどうでもいいやつ。だから組み込まれないこともあり、私の乗ったやつにはなかった。そりの直前の 2 頭がホイールと呼ばれて、舵取り役だったと思う。操縦者はその後ろの 2 本の細い板の上に足を乗せる。上り坂が急で犬があえいでいるようなときは“ハイカー！”と甲高い声で激励して、片足は地面をけて犬を助ける。片足ははずすだけでもその荷重が減るということだ。スピードが出すぎてブレーキをかけるときは低い声で“ドー”なり“ロー”といいながら、その後ろに横長に取り付けられたブレーキ・バーを踏む。かごに乗っている人もふんぞり返っていればいいというわけではなく“ゴー”でも、日本語で“ガンバレー”でもいいから、声をかけろといわれる。“犬ぞりの操縦は、犬と人間との一体作業です”と岩田さんが熱心に言う。われわれには 3 組のそりがあてがわれて、最初の組にだけこの犬ぞり会社のインストラクターが付き、二組目には心強い岩田さんが付く。女性の二組は彼らと一緒に 1 台当たり 3 人で操縦することになった。そりの片方ずつにインストラクターと一人の女性が乗るわけである。私と岩崎さんは、男なんだから二人でナントカしなさいといわれた。“え、そんなのってやばいじゃん！”。あわてて犬に愛想を使う。前の二組は 3 人乗りで、付いて行く岩崎さんと私は共に小柄であるので、普通に乘っていると追いついてしまう。だからほとんどブレーキをかける操作が中心になる。前を行く岩田さんはそりから降りてしまって、犬と一緒に走って懸命に走って



写真 3 岩田さんが操る大型車



写真 4 犬ぞりの犬たちと

いる。これに比べればブレーキ中心の操作は楽である。といっても気楽に構えているほど楽ではない。でこぼこの大きいところではそりが上下動して振り落とされかねない。前の犬が急に止まって小便を始めることもある。あらかじめそういったときの対処方法なども聞いていたので何とかだった。

コースがUターンするところには補助をしてくれるお兄さんたちがいて器用に導いてくれる。ここで操縦者の選手交代である。岩崎さんと代わって前のかごに座る。やはり座っていればいいというのは楽だ。岩崎さんがやっていたように、犬が急坂の登りであえいでいるように見えるときは“ガンバレー”と声をかける。帰りはアッという間についてしまった。

岩田さんが観光ガイドに転出した後に犬ぞり使いとして入ってきたという日本人のお兄さんが寄ってきた。岩崎さんに向かって“先生の本読んでいます。”とあって愛想を振りまきながら、われわれのみんなのカメラを預かってシャッターを押しまくっている。やはり日本人と話ができるのがうれしいのであろう。

4. スノーシュー・トレッキング

午後からのスノーシュー・トレッキングのための移動途中に、キャンモアの街でスーパーに寄って昼食の仕入れを行う。手軽なサンドイッチやサラダ、ジュースなどを購入する。初日の旅行心得説明会の折に、“カナダはカード社会ですからどこでもカードが使えます”と岩田さんから聞いていたので、カナダドルへの換金は一切しなかった。このスーパーでも数百円の買い物をカードで行った。スーパーはかなりでっかく商品も豊富である。“日本と変わらない”といたいだが、日本のほうが欧米方式を取り入れた可能性が強い。

まずはキャンモア近辺での森林へもぐりこんでスノーシューの手始めを行う。スノーシューは、まあいわば西洋輪カンジキ、といえば一番ぴったりするものであるが、私の感覚としては輪カンジキよりはるかに操りやすい。カンジキの場合は、前を歩く人と歩幅をぴったりあわせて同じ足跡を残して歩かないと、雪の上で複数の人間で歩くメリットが生かせない。私のように足の短い人間にとっては、歩幅を広げるためにがんばると、前足か後ろ足のどちらかがフラットな位置を保てなくなってしまっ、もぐりこんでしまう。スノーシューの場合はずっとがよい加減に歩くような思想で作られているから、私のようなテキトー人間にはぴったりである。

歩いている途中で岩田さんはいろいろ説明をしてくれる。旅行会社で作ったカナダの地図入りバンダナを広げて、カナディアン・ロッキーの中での今われわれのいる位置や地形的な特徴などを教えてくれる。(このバンダナはトレッキング参加証明書代わりに最後の日にもらえた) 森林の特徴にも触れていた。このあたりで目立つのはロッジポールパインという細長く真直ぐに伸びきった松である。森の木には陽樹と陰樹とがあり、ロッジポールパインは陽樹である。陽樹は日を浴びてすくすくと伸びて行く。陰樹はその隣でのんびり育つ

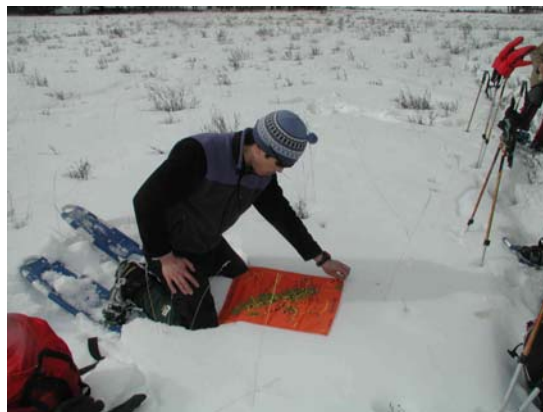


写真 5 バンダナ地図での説明

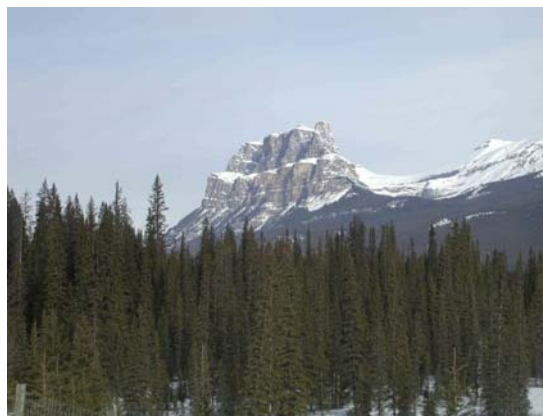


写真 6 ロッジポールパインの林

が、それでも 200 年とか長い年月を経ると陽樹の高さに近づくくらいに伸びてくる。そうなると陽樹は涸れてしまうらしい。だから森を見たときに、陽樹と陰樹の育ち具合を見れば、その森全体の年齢が分かるという。さらに同じ陽樹でも、ロジポールパインの仲間は葉っぱをこするとくるくる回せるが、もみの木の仲間は平べったくてくるくる回せない、などと教えてくれる。へー、奥は深いんだ。

中野さんはまったく 78 歳という年齢を感じさせない人である。一切の特別扱いはなかったし、当然本人もそんなものは求めていない。岩崎さんの主催している山岳会のメンバーであり、岩崎さんとの付き合いは古いようである。しかし山を始めたのは 60 歳を少し過ぎてからだという。子供のころは虚弱体質で、10 歳まで生きられるかどうかといわれたといっている。ご主人は数年前に亡くされたらしいが、娘はアメリカ生活が長く、孫は今パリにいるという。時々この孫と海外の山に登ることもあるらしい。私は何の根拠もなしに“自分が山登りをやるのは 70 歳まで”としているが、中野さんを見てるとそんなことを考えることすらバカバカしくなる。「大器晩成」という表現を超えている。日本画家の小倉遊亀さんは 100 歳を過ぎても、その画風はまだ新しさを求めていたといわれるが、それに匹敵するような人なのかもしれない。中野さんに対する表現としては「中野的成長」という言葉でも作るか。

キャンモアへ帰る車の中で草を食むエレクに出会った。鹿の一種である。ムースよりかは小さいということであるが、日本で見る鹿よりはかなり大きい。カナダの動物愛護精神は、やはり先進国のそれらしくかなり進んでいる。カナディアン・ロッキーは南北に長い。その間を縫うように道が作られるから、動物は東西方向への移動がしづらくなる。そこで動物のために、動物専用の橋が高速道路をまたいで設けられていて、何箇所か通過した。そんなこと誰が発想するのだろう。動物のご機嫌なんか取ったって選挙じゃ一票入れてくれないよ。

2 日目はキャンモアから車で 2 時間ほどのところにあるレイクルイズでのスノーシュー・トレッキングである。初日の基礎講習で歩き方にも慣れてきたので、森の中の一歩散策も苦にならない。

練馬さんと多摩さんは職場の同僚ということであるが、年齢はだいぶ違う。練馬さんはついこの間定年前に早期退職をしたということであるが、話の端々に“キリマンジャロ”だとか“マウント・キナバル”などという言葉が出てくるところを見ると、私と同じような世界名峰ハンターみたいだ。女性で



写真 7 蜂の巣山をバックにスノーシューポーズ



写真 8 草を食むエレク



写真 9 スノーシューの身支度

長期の休みがたびたび取れたということは、その職業は学校の先生であろうと当たりをつけて聞いてみると、“ピンポン”であった。いつも遠くを見るような眼差しで穏やかな表情が特徴である。見方によっては尼僧のような雰囲気さえ漂う。私利私欲とは縁がないといった感じである。山以外でも日本の古典芸能を愛するという。終戦末期生まれの私の場合は、「古典芸能＝古いもの＝排除されるべきもの」といった教育環境で育ってきた。加えて歌舞伎などの持つ世襲制というものに対しても、貧乏人の子せがれにとっては抵抗感があった。しかし練馬さんのような人から“古典芸能はいいですよ”といわれると考え方を換えようかと思ってしまう。特に狂言がお勧めだという。私も西洋音楽のクラシックを新しがって聞くなどというバカなことをしているよりも、能・狂言の世界に宗旨替えするか。

多摩さんはだいぶ若そうだ。このようなトレッキングはリタイアした人が多く、今回のメンバーも多摩さん以外はそのような年齢層である。雪に覆われた秀峰が姿を現すと“スゴイ！”と言ひ、急坂を登って上気した体にひやりとした風を受けると“キモチイイ！”という感嘆符つきの言葉が頻繁に出てくる。まだ二十歳代かと思ったがそこまでは若くないらしい。運動神経がよさそうなスタイルをしているので“体育の先生ですか”と聞いたら、なんと物理の先生ということで判らないもんだ。

5. アシニボイン

いよいよ今回のトレッキングのメインイベントであるアシニボイン・ロッジへの移動である。アシニボイン・ロッジへの交通機関は、ヘリコプター・徒歩・クロスカントリースキーのどれかから選ばなければならない。自動車道は通っていない。われわれの場合はヘリコプターが選択された。私にとってヘリコプターは始めてである。ヒマラヤなどでは、高山病にかかるかとヘリコプターで強制的に降ろされてしまうので、あまりいい感情は持っていなかったが、こういうのであれば歓迎である。乗る前にキャンモアのヘリコプターステーションで、ヘリコプター搭乗教育を受ける。歩けば一日がかりでも厳しそうな距離を、ものの15分もかからないで着いてしまった。

アシニボイン・ロッジは雪の中のオアシスといった感じでやさしくわれわれを迎えてくれた。早速午後からはスノーシューを履いてロッジ近辺の散策を行う。アシニボイン山はピラミッド型の山容をしているので、よくカナダのマッターホルンいわれるらしい。しかしそういわれることをカナダ人は好まないと岩田さんが説明してくれた。そりゃーそうだろう。カナダ人からすれば、あっちが“ヨーロッパ・アルプスのアシニボイン”なんだから。ロッジへ戻ると10人ほどの先客がポツリポツリと戻ってきた。



写真 10 アシニボインを飛ぶヘリコプター



写真 11 アシニボイン・ロッジ

全部合わせても客は 20 人といない。小屋のスタッフは 6・7 人いそうだ。それでも週 3 便ほどのヘリコプターの定期便があって、経営は成り立っているようだ。何で日本の山はいつも混んでいて、それでも経営は苦しいとって、無人化してしまうところさえあるのだろう。いつも外国の山へ来るとこのような疑問に、ない頭を悩ませられる。まあ、今日の今の俺が楽しければそれでいいんだけど。夜は例によって寒天の中に星空を求める。ロッジの周りが明るいので、感激するにはもうひとつの感じだ。

翌朝、日の出に間に合わせてロッジの外へ出た。朝焼けに輝くアシニボインをシャッターに収めようという魂胆である。しか



写真 12 ロッジ近辺の散策

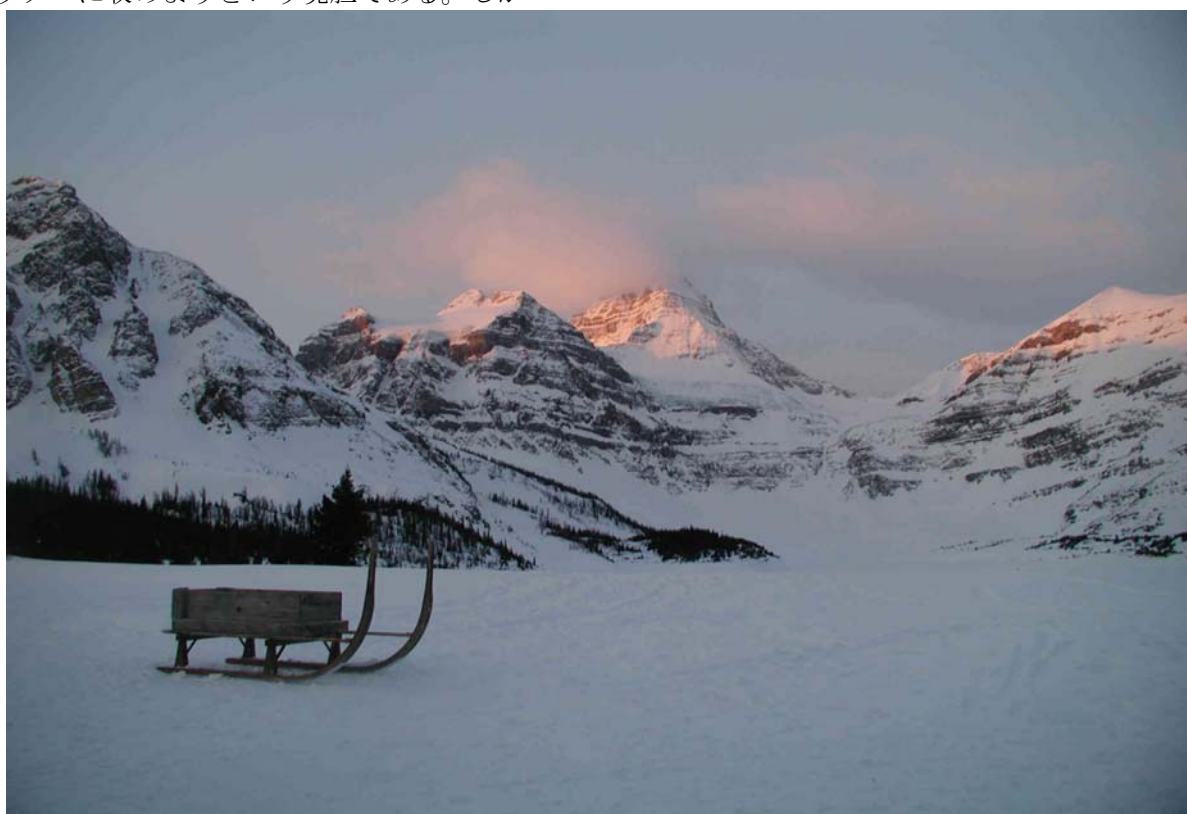


写真 13 モルゲンロートに輝くアシニボイン

しシャイなアシニボインは雲のヴェールをはべらせてその全容を見せようとしなかった。

朝食を済ませると、テーブルにはサンドイッチのパンと野菜・果物類が並べられる。アメやチョコレートもある。ここでは各自サンドイッチを自分の好みに合わせて、自分で挟み込む。こんな始めて見る。山小屋というものは、なんでも自分でやるか、何でもやってもらうかのどちらかだと思っていたら、その中間もあった。面白い。

この日は一日中スノーシュー・トレッキングである。まずはいつものようにロッジポールパインの林に入っていく。時間もサンドイッチの食料もたっぷりあるので、樹林帯を突き抜けて稜線まで出た。この日の最高到達点で昼食ということになったが、岩田さんは一生懸命に雪の整地に



写真 14 雪中テーブルとその上でのチョコレート・フォンデュ

励んでいる。テーブル状のものを作り上げると、ツェルトのような大きなビニールを覆いにして（何とかいう名前であったか忘れた）仕掛けが出来上がった。その雪の上のテーブルにコンロと土鍋を据え付けて作り出したのは、なんとチョコレート・フォンデュであった。彼のサービス精神、まさにここに尽くせり、の感がある。バナナなどの果物類をたっぷり溶かしたチョコレートに包んで食べる。ここでもまた岩田学校の臨時促成講義は折を見て行われた。今度の講義は「山脈生成の由来」である。雪の中にロッキー山脈の模型を作って海の中の堆積物の塊から生成されたプレートが押し寄せて、大陸のプレートにぶつかって出来たようすを、昨日見てきたような調子で語ってくれる。エヴェレストなどのヒマラヤ生成との共通点と、またその差異も教えてくれる。

江東さんと話をしているうちに、“あら、高橋さんの以前勤めていらした会社は御茶ノ水にあるんじゃないですか”という。“ええ”という、かつての私の先輩社員の名前が出てきた。ご主人は独立して仕事をしているらしいが、なんと同業者である。その先輩とご主人とは大学時代には同期であったということで、3人で南アルプスの仙丈ヶ岳へ登ったこともあるという。世の中狭いもんだ。でもあの先輩、結構デブだったけれど、山なんか登れたのかなー。

名残惜しいがトレッキング最終日。この日も午前中はしつこくトレッキングに出かける。岩田さんの発案で、大雪原に雪文字を書きましょうということになった。「KANADA」でいきましょう、ということ



写真 15 江東さんとお互いに写真を撮り合う



写真 16 CANADAの雪文字づくり

で、78歳も30ちょぼちょぼも、爺さんも（今回の男では私が一番年上：したがって私のこと）、誰もかもがまるで子供のように、“ちょっとまがったよ”とか“そこで引き返せ”なんて大声上げながら雪を踏みつける。童心に返るといふ言葉がふさわしいのかも知れないが、このメンバーの誰にも当てはまらない。みんな今の自分のまんまである。人はみな進歩しなければいけないなんていう定義はないのだ。帰りのヘリコプターからでも識別できるようにと、大きな雪文字を書いたのだが、大自然はそんな甘い目論見に見向きもしてくれなかった。

引き上げる前に小屋でのビール代なんかのお会計である。ここでもカードでOKである。Tシャツやバンダナなどのお土産類も並べられて、おカミさんは計算機片手に大忙しだ。このおカミさんのお嬢さんは、この間のオリンピックのクロスカン트리スキーの銀メダリストであるということで、ついこの間までおカミさんもトリノまで応援に行っていたそうだ。残念ながらメダリストのお嬢さんは、まだワールドカップを転戦中であるということでお目にかかれなかった。

帰りのヘリコプターがやってきたので、いよいよお別れだ。来るときは誰が助手席に乗るかでじゃんけんをしたが、帰りはみんなが自分は助手席に乗った経験があるといつて、私に譲ってくれた。皆さん人間ができています。ありがたくご好意を受けることにする。ロッキーの大自然が眼科に展開される。ロッジポールパインも上から見るとまた印象が違う。雪の中を蛇行しながら流れる川を見下ろす。今まで見たことのない角度から見下ろす光景は、誰も知らないことを新発見したような気持ちにさせてくれる。わずか15分であるが、その世界に酔いしれた。



写真 17 ロッジのお会計

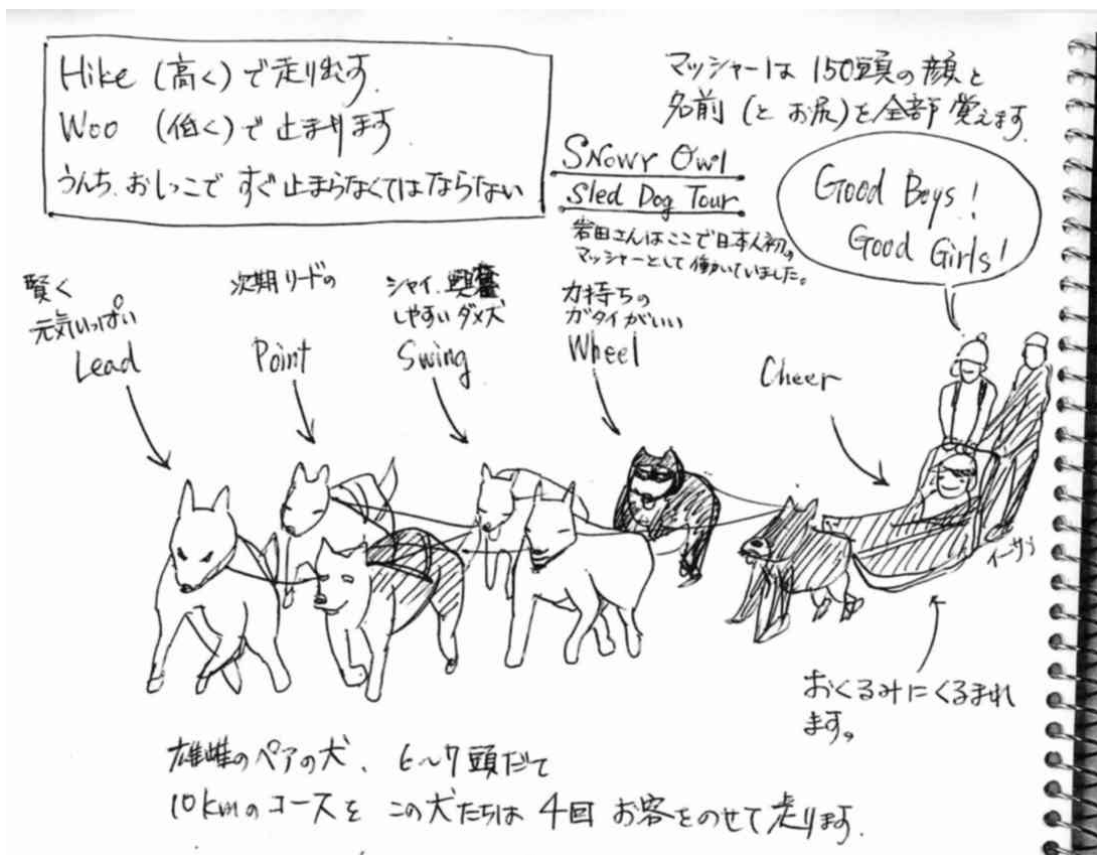


写真 18 ヘリコプターから見る川の蛇行

6. 日本での反省会

キャンモア在住の岩田さんは、われわれが帰った次の日にカナダ観光の宣伝のために日本に来るという。岩崎さんの発案で、早速反省会を開きましょうということになり、帰国後2日目にはメンバーの再会が果たされてしまった。私も十数回の海外登山経験を持つが、日本へ帰ってから再会をすることはほとんどない。'97年のキリマンジャロ仲間とよく会うのは異例と言えるくらいである。最近では個人情報の保護などという余計な配慮のおかげで、メンバーの住所録さえ配布されない。人との出会い、そして別れ、この情感をなくしたら何があるのだろうか。今回は岩崎さんのような方がいていただけだったので、そんなギャップを埋めてもらえた。

岩崎さんは、再会するとみんなのために自著「登山不適格者」を用意してくれていた。しかも自筆のサインまでしてくれた。この本はまるで私を反面教師として書いたような内容であった。ナニナニ、「単独登山はするな!」「パーティーの足を引っ張る我慢強さと見栄っ張り!」「自分の若さと健康を疑わない中高年!」「これから登る山をろくに調べもしないでただ登ったというだけのやつ!」。岩崎論法では、本来は「クソさえ持ち帰るべきである!」という。デモネー岩崎さん、「クソも自然のうち」だよ。キジウチの心地よさを懐かしんでいるのは俺一人じゃあないはずだ。オットー、調子に乗りすぎると岩崎さんのパンチが飛んでくるのでこの稿は終了としよう。



トレッキングメンバーの多摩さんが書いた犬ぞりのスケッチ。このほかにもたくさんスケッチを送ってくれた。こんなことを簡単にやってのけてしまう才能がうらやましい。物事の楽しみ方に対する質が違うと言う印象を受けた。